

2019 年度第 8 回

vol.260 物学研究会レポート

「光環境が変わる、都市、建築、空間」

面出 薫 氏

照明デザイナー、ライティング プランナーズ アソシエーツ (LPA) 代表

2019 年 11 月 19 日

物学研究会
BUTSUGAKU Research Institute

第8回 物学研究会レポート

2019年11月19日

2020年を目前に大規模な都市改造が進む東京。そして経済成長、グローバル化とともに急激に変貌する世界中の都市。その都市開発・建築デザインに欠かせないのが光環境のデザインです。しかし明るくなりすぎた都市は、光に満たされるあまり、陰影を失い、重層的な都市の魅力を失いつつあるという課題も見えてきました。

面出薫さんは、国内外の多彩な光環境デザインを通して、都市、建築、室内をより豊かで魅力的な空間へと変換しています。今回は、面出さんとLPAのプロジェクト、そして照明探偵団の活動から、最先端の光環境のデザイン、光と陰影の関係性、光が及ぼす心の作用などについてご講演いただきます。

以下、サマリーです。

「光環境が変わる、都市、建築、空間」

講師

面出 薫 氏

照明デザイナー

ライティング プランナーズ アソシエーツ (LPA) 代表



面出 薫 氏

はじめに

面出： みなさん、こんばんは。ただいまご紹介いただいたように、私は照明デザイナーといっても、照明器具のデザイナーではなく、建築照明デザインという仕事をしています。今日は、その内容がどのようなものかということと、もう一つ私が団長をしている、街のあかりを観察・調査する「照明探偵団」という照明文化研究会の活動についてお話しします。

初めに、5分ほどのビデオをお見せします。これは、ライティング プランナーズ アソシエーツ（以下、LPA）という私たちの会社のこれまでの活動を簡単にまとめたものです。

会社を設立したのは1990年。最初は6人のチームから始まったのですが、現在は東京のほか、シンガポールと香港にも拠点を構え、合わせて約60人の規模になりました。

ビデオは、2015年までの25年間の私たちの活動と代表的なプロジェクトが流れますので、ご覧ください。

<ビデオ上映>

これは、LPAの25年の軌跡を収録した『LPA 1990-2015 建築照明デザインの潮流』という本です。この本の中では、25年間に手がけた代表的な仕事を五つのフェーズに分けて、時系列で紹介しています。今日は、それになぞらえながら具体的なプロジェクトについてお話しします。

phase1 建築照明の啓蒙 (1990-1995)

会社を立ち上げた初期、伊東豊雄さんと磯崎新さんから、建築照明デザインを実践するいろいろな場をいただきました。お二人にずいぶん助けられて、私たちの職能が育ったのだと思っています。

●伊東豊雄との仕事

これは、伊東さんとやらせていただいた、「フランクフルトのオペラハウス」で、昔はシャガールの絵が描かれていた天井を、パンチングメタルとファイバー照明のデザインによって改築したものです。その後、「ホテル・ポリーニャ」や、「諏訪湖博物館」も一緒にやらせていただいたのですが、伊東さんは規模が小さいものでも非常に丁寧に、建築照明とはこうなのか、あんなのか、と一緒に一喜一憂してくれました。

これは、青島都知事時代に中止になってしまった都市博です。光のインスタント・シティをつくるんだと言って、ものすごくエネルギーをかけた楽しい仕事だったのですが、実現しませんでした。

●磯崎新との仕事

これは、磯崎さんと、ランドスケープデザイナーのピーター・ウォーカー、照明を僕らでやらせていただいた「播磨科学公園都市」。そしてこれは、同じ磯崎さんとの仕事で「大分県立図書館（豊の国情報ライブラリー）」になります。ここでは梁の上に高出力の蛍光灯を並べて、天井から跳ね返ってくる光を拡散して全体を照らしています。これをつくるとき、磯崎さんがLPAの事務所に模型をもって

きて、四面どこからでも採光できる建築だがどうしたらいいのか、と相談しにいらっしゃったんです。このように、できるだけ建築設計者と照明について一緒になって悩むことができると、建築そのものが光をテーマにしたものになるのだなと実感しました。「京都コンサートホール」もすごいプロジェクトでしたね。

phase2 公共空間が語ること (1996-2002)

この期間に、「東京国際フォーラム」と「JR京都駅ビル」という二つの大きな仕事ができましたが、われわれにとって非常に名誉なことでした。

●東京国際フォーラム

「東京国際フォーラム」の仕事の依頼があったのは、事務所を設立した3日後。ラファエル・ヴィニオリ事務所から、この仕事を引き受けるのなら、すぐニューヨークに来るように、という連絡がありました。

照明の技術はどんどん進化していくので、最初はハロゲン電球やローボルトハロゲン電球だったのが、コンパクトメタルハライドランプ、LED、とどんどん変わっていくので、照明が当初のかたちを呈していないことが多いのですが、ここはとでもきれいにメンテナンスされています。

これからも進化は続きますから、どのタイミングで、どんな新しい技術に更新するかという読みが大変なんです。ですからクライアントには、竣工して終わりではなく、わずかなフィーでもいいので、継続的に照明の診断をさせてくださいとお願いしています。

●JR京都駅ビル

「JR京都駅」をやったときは、設計者の原広司さんが黒御影石を使って、ピカピカさせない暗いものをつくりましょうということだったので、「陰翳礼讃」という言葉を使いました。今はどんどん光が足されているので、この写真とは違ってきていますが、京都の人たちには、薄暗い駅によく耐えていただいたと思います。

phase3 建築照明の作法 (2000-2005)

この時期は「せんだいメディアテーク」や「国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館」などを手がけていました。なかでも私たちにとっての目玉は、<ギャラリー・間>で開催した「建築照明の作法」というテーマの展覧会でした。2000本の光ファイバーを垂らして、光によって空間が変容する実験室のようなものをつくったり、LPAの事務所の雰囲気再現したりしながら、建築照明デザイナーはどのように光を発想し、光によって建築をどのようによくしようとしているのかを展示によって伝えました。

そして、仕事をしていくなかで見つけた思想と作法を、12の代表作の写真とともに解説した『面出薫+LPA 建築照明の作法』という本を展示会の開催に合わせてつくりました。

また、ずいぶん後になってから、今度はこの作法を言葉にして語ってほしいと言われてつくったのが『建築照明の作法—照明デザインを語る 10の思想と27の作法』という本です。その内容をご紹介します。

●建築照明の10の思想

1. 光は素材である

光は、建築の出来栄を変化させ、建築素材そのものの価値さえも高めたり、台無しにしてしまったりもする。もしも建築家が、光を建築素材だと考えて、最初から光のことに心を砕いてくれたら、ずいぶん違うものができるだろうということです。

2. 照明器具は道具である

照明器具というのは、キラキラした格好いいオブジェなどではなく単なる道具。画家がいろいろな筆やナイフを使うのと同じように、細かい光や美しい光を生み出せる道具がないと、私たち建築照明デザイナーは勝負できません。

これは「東京国際フォーラム」の写真ですが、このとき床に埋め込まれていた光を発するメカニズムは、とんでもなくすばらしいものでした。

3. 輝くべきものは建築であり人である

輝くべきは照明器具ではなく建築であり人。建築そのものが大きな照明器具になって、そこに立ち入る人が輝いて見えるかということが大事。照明器具がきれいなのではなく、むしろ照明器具の姿かたちはなくて、そこを歩いている人が格好いいねと言われる、そういう姿をつくりたいということです。

4. 自然界のルールに学ぶ

照明デザインは、自然光の技を超えられないので、自然からルールを学ぶしかありません。それは太陽の光と火であり、ときどきはホタルだったりもします。

5. 光は時を視覚化する

光は、切り取られた1枚の絵のように静止しているものではなく、必ず移ろいでいるし、変化しています。光だけが唯一、時間というものを視覚化できるもので、光のデザインは時のデザインであると思っています。

6. 空間の機能が光を選択する

空間の機能が光を選択するので、まずは空間の機能が一番大切です。この機能が必要とする光が何なのかという理屈をここでは言っています。

7. 光は機能を超えて気配を創る

機能に従うことが大切なのですが、最終的にはそれだけでは十分ではありません。それを超えた心理的機能や効果に迫るものが必要で、これを私は気配と呼んでいるのですが、そこまではまだ行き着いていません。それは、音の景色であったり、そよぐ風をであったり、といった光だけの性質ではつくれないものです。

8. 場の連続性にこそドラマが生まれる

ある空間の明るさに対して、次の空間の明るさをどのように設定するか。あるいは、ある空間の白い光から次の空間のオレンジ色の光にスムーズにつなげるにはどうするか。つまり、シークエンシャルな照明設計が大切で、そのために光の紙芝居のようなものを細かくつくっています。

9. 光はつねにエコロジカルである

照明デザイナーは、ここを照らしてくれと言われると、そのままそこを明るくすると思われがちですが、逆に、エネルギーが少なくて済むように光で工夫することで、いい照明デザインができると思っています。つまり、最終的にはエコロジカルであることが、いいデザインだという褒め言葉になるのではないかと。

10. 光＝陰影をデザインする

光をデザインするときには、まず光ありきではなく闇から出発して、その闇に光の姿を慎重に加えていく姿勢が大切です。すると結果的には、この光がきれいだということは、この影がきれいだということになる。だから光と影は、あるところでは同一人物なのだと言っています。

●建築照明の27の作法

建築照明の作法として、「心」「頭」「手」の項目に分け、それぞれに九つの作法を挙げています。

【心の作法】

1. デザインのプロセスを遵守せよ
2. 光の主題を明らかにせよ
3. 光のディテールを磨け
4. 不快な光を見極めよ
5. デザインに理屈を用意しろ
6. 建築家の誤解をただせ
7. 情熱と経験と勇気をもて
8. クライアントを仲間になせよ
9. 自然光をデザインせよ

「心の作法」としては、コンセプトやテーマをきちんと語れることが大事。そして、結果的にもっとも大切なのは、それを裏付けするディテールだと。そして、建築家は楽観的な誤解をしている場合が多いので、そこはきちんと勝負していかなければいけない、ということを行っています。

【頭の作法】

10. 照明デザインのシナリオをつくれ
11. 動画で語れ
12. 新技術の真偽を見抜け
13. 昼と夜とを反転させよ
14. 光の時間割を示せ
15. オレンジのために青を使え
16. 建築そのものを照明器具化せよ
17. 金を掛けるな
18. グレアレスから出発しろ

「頭の作法」は、まず金をかけるなどということ。照明デザイナーを入れると、なんだか金がかかりそうだと思われてしまいます。普通はそうであることが多いのですが、私たちはそうではありません。安普請でありながら、うまくいく方法を知っているし、それがきちんとできないといけないと思っています。そして、グレア（＝不快感を与えるまぶしさ）を生じない光が一番大切だということ。

「オレンジのために青を使え」というのは、オレンジ色をきれいに見せるためには、青を使うという意味です。自然界の中で青とオレンジというのは、本当にきれいな友だちです。

【手の作法】

19. 光源と照明器具を隠せ
20. ミニマムな光と照明器具に徹しろ
21. 高性能な道具を使え
22. 側断面図に光のコンセプトを表現せよ
23. 天井を床に落とし込め
24. 80%の効果を予測せよ
25. 照度計算に安堵するな

26. 人の姿の入った絵を描け

27. 現場で光を創り込め

「手の作法」としては、事務所で考えたり、絵を描いたりしているだけではなく、とにかく現場でつくるのが大事だということです。パースを描くときには人の姿の入ったものにする。そして、照度計算をして終わりになってしまっただけではいけない。なぜなら、光の効果の20%は予測できないから。80%の予測ができるのは、いろいろな失敗を繰り返してきたことによるものです。

●せんだいメディアテーク

「せんだいメディアテーク」も、コンペのときから伊東豊雄さんと話し合っ、ワクワクドキドキしながらやった仕事です。7階の天井照明は東日本大震災で全部落ちてしまったので、ここだけは新たにダウンライトに変更しています。

●刈田総合病院

「刈田総合病院」は、芦山太郎さん、北山恒さん、堀池秀人さん、という3人の建築家と一緒にやった仕事です。病人にとって光はとても大事なものです。この頃の病院はどこも、死んでしまいうるような光でした。その原因は、働く人のために光がつけられていたからなんです。だから、患者さんを一番のプライオリティにした光をつくりました。

●六本木ヒルズ

「六本木ヒルズ」は5年半かかりました。これはいろいろな能書きがあって、いいものができたでしょうと胸を張って言える仕事だと思っています。この巨大なクモの彫刻は、森稔さんが最後のほうになって買ってきいたので、照明を当てろと言われても器具を設置する場所がどこにもなくて困りました。そんなとき、60階にある航空障害灯のためのニッチを使っていないことを私が思い出して、そこから

400Wのショートアークメタルハライドランプというのをつけたんです。これは大成功でしたね。

●国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

長崎に行かれることがあったらぜひ訪れてほしいのが、この「長崎原爆死没者追悼平和祈念館」です。設計を担当した栗生明さんは、原爆で亡くなった約7万人の方の多くが、水を求めながら亡くなったので、直径約30メートルの水盤をつくって慰霊したいとのことでした。そこで、黒御影石の水盤の底に7万個の光ファイバーを埋め込んで、水中に死没者の数と同じ光が灯るようにしたんです。

このとき、まったく予測していなかったのが長崎の風でした。この水面に風が吹くとその光がススッと揺れたんですね。動画でお見せできないのが残念なほど、これは本当にきれいで心を打ちました。ただきれいだというのではなく、今でもドキドキするような感じです。

このように、建築照明デザインは自分が期待している度合いを超えて、120%の結果になることがごくたまにあります。

●京都迎賓館

次は「京都迎賓館」です。まだ内井昭蔵さんがご存命のときに建築委員会が開かれ、そこで建築照明デザインの考え方を説明してほしいということで、和のあかりの5原則についてお話ししました。和の光は、重心がかなり低いんですね。日本には、天井に吊るすような照明器具はありませんでしたから。そして、グラデーションをもってスーッと消えていく「消えざま」みたいなものが大切だということや、炎に近いような暖かい光であるということをお話ししてつくりました。

●茅野市民館

これは世界中の照明デザイン賞を総なめにした「茅野市文化館」。これは図書室ですが、照明器具は天井ではなく空調のところに設置して、天井を反射板にしてそこから跳ね返る拡散光で全体を照らし

ているんです。私たちは、これをスーパーアンビエントライト（超間接照明）と呼んでいます。このように、天井をスッと照らすものがあると、そこから反射してくる光が柔らかい影をつくることのできるのです。

phase4 海を越えアジアへ（2005-2009）

2005年からの5年間は、シンガポール、中国、香港の仕事がとて増えた時代です。シンガポールの事務所をつくってから少し時間が経った頃で、幸いなことにシンガポール政府の仕事がたくさんやらせてもらいました。ノーマン・フォスター、ザハ・ハディド、レム・コールハース、ダニエル・リベスキンドといった人たちと海外で仕事をするることによって、私たちはとても鍛えられました。

●シンガポール ワンノース地区マスタープラン

これは、ザハ・ハディドが2002年のコンペで提案した、シンガポールのワンノースという都市のマスタープランです。私たちは「進化する夜景」をコンセプトとして、ザハが考えた一つひとつの都市をつくる要素を光に置き換えながら、それがどんどん進化していくという計画案をまとめました。

●Lighting Masterplan for Singapore's City Centre

その後、シンガポール政府の都市開発庁（URA）からの依頼で、シンガポールの30年後の夜景のマスタープランと、それを実現するための照明のガイドラインをお手伝いしました。さらに、この仕事の成果を発表するために、シンガポール政府が

「LIGHTING UP OUR CITY CENTRE」という展覧会を3ヵ月にもわたって開催してくれたんですね。これは、すごいことだなと思いました。国が市民に対して「私たちの国の中心市街地は今後このようになるから、みなさん学習しなさい」と言っているようなものですから。

●Alila Villas Uluwatu Bali

これは、WOHAという若手の建築家とやったバリのリゾート施設です。リゾート地もエコロジカルであるべきだということで、白熱灯だけでなく

LEDも使って、省エネをしながらうまくいった例です。白熱灯とLEDをコンバインするのは、色温的にもとても難しいことなのですが、非常に慎重にやって成功しました。

phase5 陰影のデザイン（2008-2015）

私は、ヤマギワの研究所にいた頃から、光のデザインではなく陰影のデザインを大切にすべきだと考えていました。明るくしないと怒られるという強迫観念がありながらも、きれいな陰影が整ったギリギリの明るさというものを納得させることが私たちの仕事だろうと。そして、2010年によく『陰影のデザイン—都市と建築の照明』という本を出すことができました。

この本を出版した翌年に東日本大震災が起きて、私たちは考えられない光景を目にしました。ちょっと不謹慎なのですが、この震災が私たちに新たな価値を教えてくれたと思っています。

日本は、美しい自然との駆け引きとのなかで、過去に何回もこうした災害に耐えてきたわけですが、今回の震災では原発がやられてしまい、どこでも節電が求められるようになりました。このような事態になって初めて、今までエネルギーを使いすぎたのではないかと、光を足すばかりではなく陰影のデザインをもう少し考えたほうがいいのではないかと誰もが思うようになったわけです。そして、そういうことを言っても憚られない、聞いてくれる耳をみんなが持ってくれる時代が来たと感じました。

●寺社仏閣の陰影

これは、明治神宮の「アカリウム」というイベントの写真ですが、陰影のデザインの大切さを知ってもらうのに最適なのが寺社仏閣だと思っています。たとえば、神社やお寺にはきれいな闇、きれいな暗さがありますよねと言うと、そうだねと理解してくれますし、ヨーロッパのゴシック建築とは違って、寺社やお寺には外から光を照らすライトアップのようなものは合わないんじゃないですか、と言ったことに対して同意してくれますから。

●東京駅丸の内駅舎

100年前の建築が蘇った東京駅丸の内駅舎も、ライトアップするというとワットと外から照らして輝かせる、ということになってしまうので、私たちはできるだけ細かな陰影の強弱をシミュレーションして、影をつくろうと考えました。これも、東日本大震災があった後に、日本人が少しずつ陰影ということを考えるようになったからできたことだと思います。

●Gardens by the Bay, Bay South

日本だけでなく、シンガポールの「ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ」のプロジェクトのときも、シンガポール政府に対して陰影が大切だと口説き落として、陰影のデザインを実現することができました。

●成都 太古里

これは、成都で成功したプロジェクトで、低層の歴史的な建物を維持しながら、中国らしいショッピングモールをつくらうというものです。切妻の軒の部分などを少しアップライトして、ポール灯のようなものは、できるだけ楚々としたデザインにしました。

中国の人には失礼かもしれませんが、発展する中国ではエネルギーの無駄遣いや、われわれが言うところの光害＝ライトポリューションという無駄な光が多いのですが、ここではそうしたことの無い好例になりました。その後、この光環境を見たと言って、新しい仕事を依頼してくれるクライアントも結構います。

●みんなの森ぎふメディアコスモス

これは、伊東豊雄さんが設計した「みんなの森ぎふメディアコスモス」です。ここは、図書館としての総エネルギーを従来の半分にしようというもので、エネルギーを使わなくても、このような空間ができるというサンプルにもなっています。

●Jewel Changi Airport

これは、竣工写真はありますが、シンガポールのチャンギ空港の第1ターミナルにできたJewelという複合施設です。マリーナベイ・サンズホテルをつくったモシェ・サフディという建築家の設計で、

大きな森の中のショッピングセンターというコンセプトになっています。

以上が、照明のデザイナーの仕事のお話です。ここからは照明探偵団の話させていただきます。

照明探偵団の活動

照明探偵団は、1990年に発足した、街のあかりを観察・調査する照明文化研究会です。街に出ていろいろな光について探偵していくと、ネガティブなこともしっかり見え、人間と光の正しい関係性を探り当てることができるので、すべての照明デザイナーは照明探偵であるべきだと思っています。

●照明探偵団の5ヶ条

照明探偵団のメンバーシップカードの裏には5ヶ条が書かれています。

- 1) 常に身の回りの光の害に憤慨すること
- 2) 深く鋭く現場の光を観察すること
- 3) 芸術的な光に大げさに感動すること
- 4) 感動的な光の内容を冷静に推理すること
- 5) 光の体験を継続的に蓄積すること

まず、身の回りの嫌な光やまずい光に対して憤りをもつ。そして怒る理由もきちんと語れるように観察してください。また、怒りだけでなく感動することもたくさんあるはずだから、大げさに感動してもらいたい。一方でなぜ心が惹かれたのかを冷静に語れるようにしないといけない。そうしたことを長く体験していくうちに、光や照明の見方が変わってきますよ、ということが書かれています。

●日課的な活動と市民参加型の活動

日課的な活動としては、光の英雄と犯罪者を探す「街歩き」と、それを報告しながら飲み会を行う「サロン」を3ヶ月に1回程度開催しています。また、市民参加型の活動として「夜景ウォッチングツアー」、「ライトアップニンジャ」、「100万人のキャンドルナイト」というイベント、セミナーやシンポジウムのほか、子ども向けのあかりのワークショップも頻繁にやっています。

●ライトアップニンジャ

ライトアップニンジャは、最近はやっていないのですが、ある場所を無許可でサッとライトアップして、サッと逃げるという活動です。結構おもしろいのですが、体力がいるんですね。

この写真は、銭湯の外壁に温泉マークを勝手にプロジェクションしているところです。もう一つは、大型のプロジェクターで高架下を照らしたときの写真ですが、このときは地元の方に叱られました。

サンパウロでライトアップニンジャをやりたいと言われて招待されたときには、オスカー・ニーマイヤーが設計した巨大なビル「Copan」をライトアップすることになり、そのためのプランをコンテストで選んで、1位になったプランを実施しました。

●世界の光環境調査

照明探偵団のウェブサイトの「WORLD LOGHTING JOURNEY（世界の都市照明調査）」というページにアクセスすると、いろいろな場所の夜景が見られます。世界中の異なる光環境を並べることで、ローカルな光の文化の比較した議論ができるようにして、最終的には、世界中に探偵団のウェブカメラをつけて、リアルタイムで夜景が見られるようなライブラリーになればいいなと思っています。

●子ども向けのワークショップ

子ども向けのワークショップをやると、彼らは大人のように嘘をつかないので面白いんですね。そして、英雄や犯罪者として取り上げるものに対する意見が、大人とは必ず違います。彼らなりの理由があるのですが、教育しておかないとまずいことになってしまうという気もします。人工的な光ばかり見て育ってしまっているわけですから、月あかりを見たことはあるのかと。それで毎年、武蔵小金井の江戸東京たても園に行って、きれいな暗さの中で肝試しをしたり、いろいろなところを自分たちでライトアップしたりする機会を設けています。

●世界照明探偵団活動

照明探偵団の活動は、東京の本部のほか、ストックホルム、ハンブルグ、シンガポール、ニューヨーク、マドリッド、台北、サンチアゴなど、世界に広がっています。そうした世界中のコアメンバーが年

に1回集まって、その街で地元の人たちとワークショップを行い、あかりを文化的に語るフォーラムを2002年から開催しています。コアメンバーの人たちは有名なライティングのプロなので、みんな多忙です。それなのに、今度のフォーラムはいつやるのかと言ってスケジュールを組んでくれるので、彼らにとっても楽しく、そして学ぶところがあるのだと思います。

●世界照明探偵団フォーラム 2017 in 京都

これは2017年に京都で開催したフォーラムです。このときは、京都造形芸術大学、京都大学、京都市立芸術大学、京都工芸繊維大学の先生や学生に協力してもらい、街の英雄と犯罪者を探すだけでなく、京都の街のライトアップを実験的にやろうということになりました。

そこで、照明器具のメーカーから協力をいただいて、いろいろな照明器具の使い方を学生にレクチャーして、世界中から集まったコアメンバーが学生とチームを組んで、平安神宮や町家など、いろいろなところに分かれて、ライトアップの実験をしました。短い時間でしたが、コアメンバーからひと言ずつ講評をもらいながらやったので、学生たちはとてもいい勉強になったと思います。

この写真は、学生たちが京都の光の英雄と犯罪者を発表しているところです。京都市が後援してくれましたので、市長も参加して自分の感想や意見を述べていました。じつは京都は、昼間の景観については、ものすごくストイックにやっているのですが、夜の景観に対しては、具体的な考えがなかったのです。ですから、このような場で京都のあかりについてみんなが話したことによって、新しい考えができてきたのではないかと思います。

●世界照明探偵団フォーラム 2019 in 深圳

最後に、今年開催した深圳でのフォーラムの話をします。今回は、世界中から11人のコアメンバーが集まり、5日間にわたって行われました。深圳市や照明学会の協力によってできた催しなので、あちらの学生もやる気十分で、深圳らしいいろいろな表情をもった街角をきちんと選んでくれました。

そして、それらの街に対して、五つのグループに分かれた学生たちがそれぞれ good か Bad かをととも率直に評価していました。中国ではこうした場で批判的な意見は言いにくいのではないかと考えていたのですが、彼らにはそういうところがまったくありません。これまでイケイケだった中国が、今いろいろな曲がり角に来ていることを彼らも気づいているので、中央政府の言うことが圧倒的ではあるのだけれども、それに対してどういうふうに見解しながら戻していこうか、ということに躍起になっているのだと感じました。

深圳は、まだ 50 年ほどの歴史しかない若い都市ですが、近年急速に発展していて、これからの中国を代表するような典型的な街づくりが行われていくだろうと言われています。そのときに、照明はどうなったらいいのか。おそらく今回の議論がベースになって、中央政府のほうにまとめられていくのではないかと思います。

Q&A

Q1: 光が機能を超えて気配をつくるという話をもう少し聞かせてください。

面出: 気配をつくるというのは、最終的にそうならいいと思ってつくっているという意味です。たとえば、とても気持ちいい、整った感じのする空間があったとき、そこにあるデザイン要素を細かく探っていくとなぜそう感じるのかわかります。けれども気配はそうはならない。視覚だけではなくて、いろいろな五感が重なっていくときの、所作のような気はするのですが。以前、照明のほかに、香りや音など、五つの要素の重なりを試す機会があったのですが、うまくいきませんでした。こちらの思惑を仕組んでも、わざとらしくなってしまうので、気配というものは簡単にできるものではないということはわかりました。

Q2: 影をきれいに見せるというのが日本的な考え方だと思ったのですが、他の国々の光に対する考え方と対比したときに、どのような違いがあるのかを教えてください。

面出: いろいろな言い方があるので、ステレオタイプ的には言いにくいのですが、潔く言うと、イタリアンレストランをつくる場合と寿司屋をつくる場合の光は、ずいぶん違いますよね。日本は拡散光の文化なので、拡散した光を入れないと和食はおいしそうに見えません。イタリアンはその逆で、ワインのグラスやオイリーな料理などのキラキラした光沢感を出さなければだめ。つまり、その国の人たちの住まい方や生活のパターンの中に、自然光から得られる光のセンスや価値観が必ずあるということです。

Q3: 乗り物のライトは、乗っている人のためのものですが、歩行者や建物の中にいる人を照らしている光でもあるという視点も考えなければいけないのではないかと、思ったのですが、この先どうなると思われますか？

面出: たとえばクルマのヘッドライトの場合、昔は安全性だけを考えてきたけれども、人や物への衝突を避ける能力は、クルマが自動で制御する方向に進化しているので、ライトで照らす必要はなくなるかもしれません。そうなると、クルマ自体がうっすらと輝いているだけでいいのかもしれないし、個体や液体が輝くような素材ができれば、わずかな光だけでそれを実現できますよね。

そうなれば、安全性の基準が変わってくるだろうし、人とクルマがどう共存するのかという話になる。それにはすでにたくさんの議論があります。

いずれにしても、道路灯のように、高いところから地面を照らすという無駄なエネルギーを使うようなものはなくなるでしょう。

関: 面出さん、みなさん、ありがとうございました。

以上。

2019 年度 第 8 回物学研究会レポート

面出 薫 氏

照明デザイナー、ライティング プランナーズ アソシエーツ (LPA) 代表

写真・図版提供

物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2019 BUTSUGAKU Research Institute.